

On the theory concerning life time education of Kunizo Nakada, especially on his opinion about 'Religious Reading'

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Hashimoto, Hokei メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00029591

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



中田邦造の生涯教育思想論

—特に「宗教読書」について—

橋本芳契

On the theory concerning life time education of Kunizo Nakada,
especially on his opinion about 'Religious Reading'

by Hohei HASHIMOTO

- 目次
- 一、前提になるもの——北陸の風土と仏教
 - 二、中田邦造の生活と思想
 - 三、仏教的関心と宗教読書譜
 - 四、むすび——残された問題

一、前提になるもの——北陸の風土と仏教

むかし北陸道といわれた日本海にのぞむ当地方は、立山と白山を中心として、いわゆる日本アルプスの山系を東側に立てて比較的豊富な米作りにめぐまれ、また一部は古くから養蚕を業として安定した平和な地域であったと考えられる。住民は当初は山岳崇拜といわれる素朴な山の神、いな山そのものを神とその座と考える信仰において安定した宗教心による生活を保っていたのであるが、いすれは日本海をわたつて朝鮮半島から伝わった仏教を五、六世紀^{ころから}、さきの神道いわゆる古神道信仰に加えて北陸独自の宗教文化にそだてあげ、いろいろ百年の歩みをかさねて現代に至つたものと思われる。たとえば、氷見市久目の現代は淨土真宗大谷派に所属する永福寺の寺伝では、大伴狹

手彦（おおひのねとひこ）が同寺の開基であるとするしている。大伴家は外交官筋で、とりわけ狭手彦は半島にもわかつたと伝えられる人物である。越中の国司に同族の家持（七八五亡）がなつたのは八世纪半ば以後で時代は新しいが、家持の越中赴任の事実からさかのぼつての史伝とするよりは、むしろ逆に往古より能登越中方面に大伴氏の古い縁故があり、それが迫られて奈良時代に家持の来任もあつたものと想像する方が自然ではなかろうか。さきの永福寺は家持の歌に「奈吳の浦」とある氷見や新湊の海岸から十数キロ山方に引込んだ所にあるが、国府のあつた伏木ともそう遠くは隔たらない。

さて日本の仏教は聖徳太子（五七四~六二二）をはじまりとする。太子の仏教は出家仏教でなくして、在家本位のものであり、そこに鎌倉仏教ではとくに親鸞（一一七三~一二六二）のものへの連接が見られた。現在に至るまで北陸邊では太子信仰が井波町（富山県東砺波郡）の瑞泉寺を中心に盛大である。この寺は南北朝時代には後小松天皇の勅願所とされた。そういう政治的意味の由来には、越中でもとくに砺波平野の豊かな米作りが王朝時代いろいろ中央で重んじられてきた事実の地方的反映がうかがわれると考える。

総じて北陸の仏教は平安時代には天台宗が主流で、それにまわって

真言宗があり、鎌倉時代になると、転じて禅宗、浄土宗、日蓮宗あるいは時宗が武家や社会の上層部に崇められ、親鸞の浄土真宗はむしろ農民や下層階級に広まつたようと思われる。そこにも士族と農工商（平民）の社会階層の別があつたのであろう。しかも特に真宗における太子崇敬の系譜は、親鸞伝繪と太子伝繪の図像的重なり具合にまで定着しているのである。最近においては高岡市立博物館ならびに同美術館を会場とした『親鸞聖人宝物展』（昭56四・一四・五・一七）の開催にまで至り、京都における東西両本願寺をはじめ、全国各地寺院からの国宝級以下、貴重な関係資料が展示された。そういう時も、聖人のものと共に太子のものが必らずのように出品されている。ひとびとは親鸞によつて宗教を知り太子によつて文化を学ぶのであろう。とりわけ地方的に金沢は旧藩時代以来の伝統もあり同じ北陸でありながら文化的には福井や富山をおさえた形で、従つて石川県全体としても全国的に見ても高い文化水準にあるものと考えられ勝ちである。しかし宗教的、とくに仏教にある高まりをもち得ていたとしてもそれは明治維新期までのことで、維新後は次第に中央に対し落ち込んで來ていた。つまり素質的には多少ともよいものを藏しながらも文化現象面の実際においては、かなりのおくれを示していたのを、大正末期に石川県主事として着任した中田邦造なる一青年主事が、図書館業務の側面から抜本的に開覚させた一事があるのである。さていましも図書館というふうことを言つた。そこでまず図書の語から考えてみよう。われわれの日常的用語法では、「本」（ほん）といえれば一冊々々の書物を意味し、英語では「a book」である。しかし「本」の字は「もと」という訓が付せられている。そういう連想からわれわれ日本人には、書籍に対する宗教的崇拜に類するものがその根本にひそんでいる。もとカミホトケはそれ自身においては無形であり無象である。なぜかなれば、有形となり有象となると、それは有限相対化を意味するからである。無限絶対といふことがわれわれのカミホトケの表象にともなう根本的なものとすれば、それが無形無象なものとして理解されるのは、むしろ当然

なことであろう。しかしまだ同時に、カミホトケがいつまでも無象無形であったのでは、われわれ有限有象の人間には、それと具体的な心の通いや物語りをし合うことができないし、それではカミホトケの存在の意味も失せてしまうであろう。そういうことから、カミホトケにもまた「ことば」があるものとされた。そしてそれを「みことのり」などと称した。

書物の形のごときは、はるかにのちになつて文字がいまの「ことば」をうつし、さらにそれをとどめるものにされてからあとのことであつて、最初は発せられ、そして聞こえてやがてまた失せる、消え去るものとしてカミホトケのことばが理解し、尊崇された。そういうことばへの尊信の念が、やがて文字の時代になつてからも継承されたから、われわれ幼少時には、文字の載つた用紙の扱いひとつが厳格であつたよう記憶している。学校の教科においても「修身」が人間の身もち、つまり道德（ひとのみち）の全根本であつたから、とりわけ修身の教科書のごときは、床（ゆか）の上にも置かされず、大体において他教科の教科書についてもほぼ同様であつた。

人間の身もちが道德の根本であり、そういう方面を宗教では戒（かい）という。五戒とか十戒とかいうまとめ方をしたばあい、それに言葉もちや最も深い意味における心もちまでが含まれてくる。それでそれらの全体を人間の道、したがつて「おしえの本（根本）」とする理解もうまれてくる。

いま中田邦造の論をするに当り、氏を図書館人として見るのは、きわめて実際的もしくは便宜的なことであつて、氏の真相は、つまり中田そのひととしての眞実面は、もつと深くおおわれたところにあつたようである。すでに「図書」（books）ということばは複数的な書籍存在を意味したもののように、単に一冊の「本」（a book）というのとは相当のへだたりである。筆者も先年福井県立短期大学付属図書館長の任にあつて司書業務を実地に見聞したし、欧米の代表的大学の図書館も数館参観して大学教育における図書館（the library）の意義を考

え、いわゆる図書館学 (library science) の重要性についてもいささか認識を得たつもりであるが、邦造の「」ときはまさに石川県に奉職したこととが運命的にその見識を深め、かえつて自らの内にすでに藏していた読書による人格形成の道につめての広い哲学的究明をなしとげる機縁になったことが考えられるので、その師西田幾多郎博士がたまたま石川県出身の世界的学者であつたことにも思い合せ、同氏の読書学の後継者によつて一層に発展せしめられていくことを念じ、その一助として小論の筆を執つた次第である。

二、中田邦造の生涯と思想

中田邦造（なかたくにぞう）という人の名は、年輩の石川県人であれば、大抵のひとがこれを知つてゐるものといえよう。それほど県民に対する足跡の大きかつた人である。氏はもともと滋賀県の人であるが、京大を出て軍役に服し、除隊するとはすぐ石川県に着任した。すなわち、郷里において小中学校を卒えてのち、名古屋の八高に入り、続いて京大に学ぶ。京大は文学部哲学科であったが、同科の主任教授は石川県出身（河北郡宇ノ氣町字森）の西田幾多郎（一八七〇～一九四五）であった。中田は明治三十年（一八九七）の生れで、西田との年令の隔りは二十七歳である。しかし大正九年七月、二十四歳にして京大に入学し得た彼は、同月一日より十日までの巡礼日記「南天権を訪う」を遺しているから、西田に遇う以前から禅の道に志していたものであることが分る。しかし、三回生の時、「直觀」という題のレポートを西田の哲学特講に対して提出しているし、殊に『意志論』のテーマで卒業論文（大正十二月提出）をまとめ書いたことには、やはり著しく西田の思想的影響や人格的感化を得させられていたものであることが想察できる。

中田を前記の如く石川県人に親しみ多いひとにした理由が、多分に同氏が長期に亘り石川県立図書館長に在職し、種々社会的にも活動し

たことによるとするのが一般的のようであり、それも確かなことに相違ないが、氏の真に傑出したひとであることの明瞭になつたのは、むしろ石川県を離れて東京に出で、東大図書館に司書官となり、また都立日比谷図書館長となりして、戦中戦後の重大時機に中央において破格の文化活動をなしその功労を全国的に認識表彰されたのちに至つてではなかつたろうかと思う。そのことは決して氏の石川県在任中の諸業績を低く評価しようとすることではないのみならず、同県時代があつたればこそ、中田の生涯における後半期の最も充実した社会教育活動のあり得たことを思うのであるが、あわせて氏の最後三十年に亘る教育行政活動を単に図書館行政にまつわるその範囲においてのみに理解するにとどめず、これを広く一箇のすぐれた生涯教育理念にもとづく社会活動と解し、またさらに、氏には奇しくも初任地となつた石川県地方のまさに歴史的・社会的教育諸要件が、どのように中田邦造自身の人格形成に影響し得たものであるか、実証し得る限りにおいてこれを明かしてみたい。

天下の書府という評までを得た加賀旧藩以来の伝統を承けて、金沢を中心とする石川県各地の図書館行政は現在において、社会教育の視点から一応の整備状態にあると考えてよいものようである。兼六園内にあつた旧石川県立図書館は戦後、新設の社会教育センター内に併置され、また旧歩兵七連隊衛門前、大手町の街角に建つていた金沢市立図書館も、いまは金沢駅寄りの旧専売局（長町）跡地に新装のもと引越している。その金沢市立図書館のごときは、昭和三年の大礼記念事業として市が中島徳太郎の寄付金を柱に、前記大手町の旧金沢医学館跡地に建設したもの、同時にこれに賛同する多数の学者・蔵書家から愛蔵書の寄贈を受け、書庫を充たした。現在は加越能文庫を筆頭に、二万を数える近世資料・蘭学資料など、全国的に知られたものを所蔵する。ここでは右のごとき昭和初期を中心に石川県内に一連の読書運動が社会教育の意味において起されたその中心人物と見てよい邦造の生涯とその社会活動の意義を考えてみたい。

中田邦造（一八九七～一九五六）は、滋賀県甲賀郡の人。郷里の現水口町で小学校を卒え、十六歳の時、膳所（ゼゼ）中学校に進んでいた。当時はまだ尋常四年、高等四年の小学校時代であった。中学を終つた大正六年に名古屋の八高へ入る。その頃中学校卒業は三月、高校（旧制）の入学は七月一日であった。八高を出ると京都帝大文学部哲学科に入学した。大正九年七月である。さきに『善の研究』（明41一月）を出し、すでに京大教授となつてゐた西田幾多郎（一八七〇～一九四五）は、大正六年十月に『自覚に於ける直観と反省』（岩波）を、中田が京大に入った年の一月には『意識の問題』（同上）を出版している。邦造は三回生の時、西田の哲学特講に対し、「直観」と題するレポートを提出し、同十二年二月に書き終えた卒業論文は『意志論』と題していた。いずれも西田の思想的影響や人格的感化の著しい中での著作とした。昭和三年二月に京大での最終講義（同月四日、哲学概論での）をなし、八月に停年退官した西田は、それより五年後（昭8十二月）に『哲学的根本問題』（同前）を出版したが、その中で「人格的統一」論をした箇所がある。あるいは人格的統一こそが西田としては哲学の中心問題であったのでもあろうか。そのことは、『善の研究』において「宗教」問題が最大の関心事であると陳べていたこととも一貫するであろう。師の西田は中田より二十七歳の年長であったが、恩師への回想は終生失われなかつたようである。

筆者も旧制高校（四高）時代から参禅し、東京に出てからは南天棒ゆかりの乃木山道場（牛込区）に籠つて、型の如く「無」の字を課せられた記憶がある。近時中田邦造のことを噂さすると、同氏と別れて数十年になるが、朝起きて洗面器の冷水に開眼のまま顔をつける一事を、氏に教えられたまま励行している（大和七郎前宇ノ氣町長）とか、今も続けている玄米食の習慣は中田先生に教えられたもの（梶井重雄北陸学院短大教授・図書館長）とか聞く。定めし邦造の生い立ちは仏教としても神的な厳しいものが宿つていたのではないか。梶井教授によつても、中田が後年唱道した「創造的無」（schöpferisches Nichts）

の「」とかも、飯田居士、西田博士から学びとつた境地であつたとしてよいようである。そういう傑出した人格のもち主中田邦造が、大正十二年三月京大を卒業したのち、四月からは京大大学院に在籍してはいたが、同年十二月一年志願兵として輪重第十六大隊に入営、十四年四月の除隊まで軍役（えき）にあり、同月十日に石川県主事を命じられたのである。邦造二十九歳であった。そして翌年四月には社会事業主事（高等官七等）となる。その頃すでに彼のたくましい行政指導上の文筆活動は旺盛に始まつてゐた。すなわち、石川県社会事業協会が発行する『石川県之社会改良』という機関誌の第二号からの編集を、石川県に着任早々に命じられ、本名のほか、「自邦居士」「空人生」などの号で、自筆の論文を次々に同誌に載せた。そして有難いことに石川県はまたそういう論説を広い心で受け容れていく旧藩時代いろいろの大らかな気風をもつていた。それは現在においても隣県の福井や富山とは多少とも相違する所である。

〔所載論文・隨筆の題名〕

『社会改良』第一号（大14七月）

○社会生活の自覺的活動としての社会事業

○社会救済の第一義務

○饑餓に瀕しつつある世界の平和

○綠化運動

○娯楽を要せざる生活

○農民美術の紹介

○悲惨なる幸福なる追求者

○無為の二相『社会改良』第三号（大14十一月）

○空想よりも自由なる行為——社会改良の理想——

○娯楽と芸術的觀賞力

『月報』（大15一月より九月まで、八回）

○読書の内面的意義を省みて図書館関係者の任務をおもう

『社会改良』第四号（大15年三月）

- 社会事業家の要性
- 社会問題と社会事業
- 社会教育概論未成稿(一)
- 『社会改良』第五号
- 不良児の更生機関——県立育成院の紹介(一)
- 举村禁酒の河合谷村
- 不良児の更生機関——県立育成院の紹介(二)
- 『月報』(昭2三月)
- 私の態度

『月報』(同年四月)

○廉価版全集物の流行期にあたり県下通俗図書館関係者に告ぐ

『社会改良』第六号(同年四月)

○現代社会の根本問題

○本県図書館事業の現勢

○不良児の更生機関——県立育成院の紹介(一)

○不良児の更生機関——県立育成院の紹介(二)
途中であるが、ここで中田について注意したいことが三項ある。第一

は、彼の石川県への着任事情である。さきのように大学を卒え軍務

に服し、そして除隊早々に来県したようであるが、彼の素願に本県へ

志向したものがなかったかということである。そうでなくとも、本来

仏教的志向をもち、また石川県を郷里とする西田教授に就き、さらに

社会教育的関心の著しく高い中田には、石川県着任はうつつけの生

き甲斐というものであつたろうと思う。第二は、あたかもよし、当時

の石川県に——あるいは全国的であつたかも知れないが、「社会改良」

というスローガンのもとにおける社会改造(reconstruction of society)

の事態や気運があり、三十歳になるならぬの青年中田に、それがま

ことに時機を得て投合したことである。それは前掲諸論文の題目によ

つても十分読みとれることと思う。そして第三は、中田がその間、昭

和二年二月(31歳)に石川県立図書館長事務取扱を命じられているこ

とで、ただ弱冠にしてというよりは、彼が正式に内閣から公立図書館

長に任せられ、同じく文部省から石川県立図書館長に補せられたのが、それより四年後の昭和六年八月であつたことからしても、館長事務取扱の段階では、図書館業務以外についても社会事業主事(内閣任命)の役目から、彼に対して様々な期待が周囲から寄せられていたのではないかということである。中田邦造という人に対するイメージとして、よしんば広きにせよ図書館人というだけでは、氏の真相を把握し尽せないのでないのではないかということである。なぜかなら、まず社会事業なるものを「社会生活の自覺的活動」として規定し、真剣に「社会救済」を考え、「飢餓に瀕しつつある世界」さながらに、「悲惨な」れども「幸福なる」「平和」生活をのぞむ、そうした後年の創造的無の志念が、具体的現実的には河北郡河合谷村(現津幡町)の小学校建設費を出すための「举村禁酒」に感動し、「不良児更生機関」としての育生院(県立)に注目し、よりすぐれた地方行政吏員たるべき手腕のひとを、あたかもよし県立図書館長の座にすわらしめるに至つたのは、これまた天命となすほかはなかろうが、邦造その人の本分は哲学的素地に立つ「社会教育概論」も完成させるべき豊かな生涯教育思想の持ち主たることにあつたろうと考える。

彼の生涯はこののち、昭和十五年三月に石川県立図書館長を退き、翌年東京帝大付属図書館司書官として文部事務官になり、その職に二年余在任したあと、昭和十七年七月、東京都の都立日比谷図書館長に転出する。そして戦後の同二十四年九月までそこにいて官界を退くのであるが、当時よわい五十三歳ではまだまだ働けた。しかし戦中戦後の激しい公務は、恐らく氏の身心をわれわれの想像する以上に疲れしめて、いたのであろう。中田はついに退職後の読書学研究に専念のさなか、昭和五十一年十一月十五日、東京都で永眠した。享年六十歳。昭和二十四年、五十三歳にして公職を退いた中田は、以後もつぱら読書学の研究に没頭することになる。読書、つまり図書を読むということは、図書館人としての彼には、公的社會的にも片時も脳裏を離れ去らなかつた責任ある問題であると同時に、私人として幼少時より好

学で向上心に富んだ中田には、学問はすなわち読書を徹底的におこなうこととて、自律の意味でも、また特に社会教育行政の職場に立つた時は、他をして読書の風習に進ましめようとして——そこには自身の読書体験からの著るしい投影があつたと考えられるが——、石川県主事、続いて同社会事業主事に任じた大正十四、五年の頃より、しきりに読書々々とて、ひとにも奨めわれにも学びとつて読書の道の体系的構成に情熱を傾けた彼の全生涯であつて、それを読書学の一語において代表させてよからう。とりわけ、彼の読書学の中心課題が宗教や哲学の問題であったことは最も注意してよいことであると考える。日比谷を退いてから世にいう余生の八年間は、ある意味では中田が真に本来の彼に戻つてその本領たる宗教哲学観を「宗教読書」論の形においてまことに充実した内容のものとしてこの世にのこし得た最も満足した期間であるといえるのではなかろうか。

しばらくその期間中の経過をながめてみると、「二十四年九月に退職し、同年十一月にはすでに金光教図書館の機関誌「金光図書館報」の「土」七号に、「宗教読書について」を載せている。このために起した稿は、翌二十五年二月、同八号「宗教読書における読書主義と生活主体」以前後十回続いて、最終回の分は、昭和二十七年、五十六歳時の「土」二十号所載「宗教読書における靈感と讀心の問題」になつてゐる。たまたま執筆依頼者が宗教団体の金光教であつたがために、そういう主題と内容になつたとも考えられようが、彼のばあい、決して単にそれだけではなかつたことが、その執筆や思想内容からも察知できるのである。

三年余り続けた宗教読書論執筆のあとにも、「I.F.E.L.図書館学」の意義を、同図書館学誌創刊号（昭和27四月）のため書き、続いて翌二十八年三月（ファインディング・リスト編集委員会「序」）八月（図書館協会を背負い込む前後の『図書館雑誌』Vol. 47, No. 8）に各一文を草し、その翌年は休み、亡くなる前年正月に、「胃潰瘍を送り出して」を書き、そして死ぬ三ヶ月前（昭31八月）、さきの「I.F.E.L.図書

館学」第七号にこの世での最後の稿「図書群構想の基本問題——素描」を発表している。梶井氏は生前の中田に最も親しかつたから、その遺稿についても、三十一年四月、「読書科学」第二卷第一号に載つた「読書生活の目的」のほか、ガリ版三ページの「図書館職員養成所における講義要綱」、「百字詰原稿用紙」一枚の「図書群の編成を通じての読書指導について」および「読書学」と題した左の三論文、四百字詰原稿用紙で實に二千枚近いものあることを紹介している。いずれは公開されまた独立した一書としてすべて刊行されるものとは信ずるが、いまは既発表のものの範囲においてしかも特に、宗教読書論について序説ふうに述べるばかりである。

〔読書学〕

A

読書現象論

……

一一九三枚

〔B〕

読書技術論

……

四〇三枚

〔C〕

読書における自由と自在の問題

……

三一三枚

三、仏教的関心と宗教読書論

中田は、大正九年七月、二十四歳にして京都大学哲学科に入学するが、その月の一日から十日までの巡礼日誌「南天棒を訪う」をのこしている。つまり京大の学生になつて西田幾多郎に会う以前から、参禅の道に心得があつたわけである。梶井氏が言うごとく、「中田邦造の諸論文は、哲学的宗教的的理念に富んでゐる。そしてそのルーツは、禅と西田哲学であつた」のである。（解説227頁）そして京大に入学するまで三年間在京した名古屋の八高時代が、「彼の禅学修業時代」であつたもののようにである。（同上228頁）その日誌によると、当時「彼は一方、哲学や宗教に関する図書を読み、思案にあけりながら、ひたすらに坐禅を組み、他方ではかなり激しい労働に従事していたことが分かる」（同上）という。また彼は、八高時代に弁論部員であつたともいう。いつたい彼の時は、小学校はまだ「尋常」が四年、その上に「高等」が四年の時代で、それをすませてからの中学校（滋賀県立膳所中学校）

五箇年であり、その上の高校（旧制）を終えたのでは、年令的に現在よりすべて二学年のずれがある。梶井氏によれば、八高時代中田が就いた禅学の師は、飯田桜隱（とういん、一八六三—一九三七）といふことで、その桜隱の師が、乃木將軍の師として有名な南天棒（一八三九—一九二五）であり、中田は師の桜隱を介して南天棒のことを聞いたものだから、さきのよう高校を卒業し、大学に無事に入学できた機会に早速そこへ参じたものなのである。筆者は東京で南天棒ゆかりの乃木山道場（牛込区富久町）に学生の時、独参したが、昭和六年、七年頃でもとより南天棒亡くなつたあとではあつたが閑寂な僧堂の氣風はまだのこつていた。梶井氏は中田から桜隱の名著『無門関鑽燧（さんすい）』をゆづられた由であるが、桜隱、南天棒、共にすぐれた禅学匠で、著述も多い。無門関（一巻、宗紹編）のときには、宋の無門慧海が古人の公案四十八則を指評したもの、禪門公案頌古の巨璧で、碧巖集、從容錄と共に禅林において最も尊重されるもの。旧制高校ではどこにも仏教青年会があり、金沢の四高では北陸仏教青年会が毎日曜に八坂の松山寺で増田雪巖師を師家に參禪会を開き、高校生のほかに一般市民も多数参加していたように記憶する。幹事として筆者は市中に從容錄の提唱あることなど毎度張り紙をした。しかもそれは中田が石川県に来て漸く三、四年の時期であり、昭和五年十一月のごときは彼が県立図書館において「万葉展覽会」を催し、それについての記事を「万葉展覽会の後に」（協会報）、「地方における図書展覽会について——万葉展を終りて——」（月報）にして報告している。前ま、農村民教養に尽してきた中田は、市民県民の文化教養向上にも意を用い、華語的讀書組織の統一化と推進に努力し始めた。天下の書府の評をまともにした旧藩以来の金沢の地にあり図書館長の要職を通じて、社会教化に働くと共に自身の修養にもおさおさ怠りはなかつたのである。

転じて仏教図書館である経蔵の意義を考えてみたい。

仏教で七堂伽藍といえば、まず「伽藍」は僧伽藍摩（Samgharāma）

つまり僧衆の舍屋のこと、そして七堂は金堂・講堂・塔・鐘樓・經藏・僧坊・食堂（じきどう）の七ともし、あるいは最後の二に代えて中門・大門（真言宗）を置くとか、あるいは全く別に仏殿・法堂（はつどう）・僧堂（これを雲堂ともいは、雲水堂の略称）・庫裡（くり）・三門（また山門）・浴室・西淨（便所）の七をかぞえる禅宗のばあいや、唐様の七堂として右の法堂以下に宝塔・東方丈・西方丈・鐘樓・鼓樓・山門の六を当てるものなどあるが、七は箇数を表わすばかりでなく、インドでは完数を意味するので、七堂伽藍において完備した僧堂といふことを表わしたものといえよう。ところで古典的な全僧堂理解のうちに、「經藏」の一屋のあることは、仏教の教義上の関連においても注意してよいことであろう。

經（sutta, sūtra 修多羅）は、仏所説の法（dharma, dharma 達摩）で、宗教としての仏教においては教理上、仏陀（buddha）にならべて大切な要素である。三寶（triratna）は仏教徒としては必須な所帰依の神聖な対象であつて、その第一が仏陀、すなわち法の能説者、第二はいまの經法そのもの、そして第三がさきの僧伽（僧侶）なのである。しかし、經の字はもと「タテイトイ」を意味し、これに対する「ヨコイトイ」は縦であつた。中国では經（ケイ）は、聖人の述作にかかる書で、これを經書（四書五經）と総称し、經史子集にも分けた。五經（「」）のよう、易（周易）・詩（毛詩）・書（尚書）の三經と、春秋・礼記の五であるこというまでなく、人道の根本とされてきた。そのごとく、仏教においても仏陀所説の法門は、最高の生活規範たる意味を有するものと聞信されてきたから、中国に至つてはこれに「經」の訳語が与えられたわけである。しかし仏陀釈尊の時代にはいまだ文字はなく、ただことばがあるだけであった。したがつて一切經とか大藏經とか称して、すべての經文を七堂中の經藏中に所蔵することは、むしろ仏語（佛陀所説の語言）が漢字漢文にうつされていわゆる經典となつてからのことである。現代では図書の語をもちい、したがつていまの図書館がかつての經藏たるものともいえる。しかしあだ異なるのは、そ

いう文字にうつしかえられた図書、もしくは広く書物が一般的になる以前においては、「人」とはが最も人格的なものとして、特に宗教の領域においては神仏の宣言や宣告が信仰上の決定的な中心存在であつた。しばらく日本におけるばあいを考えてみよう。

日本最古の文化については、いわゆる神代記で、古事記・日本書紀におけるそれらによつてその詳細を知るほかないが、文字が出来、やがてまた中国や半島から大陸文化が伝わると、奈良時代にはすでに大宝令という大宝元年（七〇一）に発布された官制中に、図書寮が現われるほどにまで文化施設やその経営が進歩した。この寮では政府の図書、経文等の保管と国史の編纂がその仕事であったが、わが国図書館のはじめと考えることもできる。同寮が保管する図書類は、為政者の参考と大学学生等の閲覧用であった。地方にも太宰の「府庫」のひとと官文庫があつた。一方わが国の仏寺は、もと官寺の形をとることで発達したから、諸寺院の経蔵には、中央・地方とともに公費による施設中に、すぐれた仏教図書が所蔵された。法隆寺に宝亀元年（七七〇）に印刷の四種陀羅尼が多数収まつたときがそれである。しかもこれは、世界最古の印刷物とされている。

奈良朝末、いまの宝亀年中、大納言石上宅嗣（いそのかみやかづぐ）が、私邸を捨てて建てた阿闍寺（あしゃくじ）はその一隅に外典（儒書）院をおき、これを「芸亭」（うんてい）と称したことが続紀36に出る。これは今日の図書館と同趣意のもので、しかも民営であつたことに興味がある。

仏教において三藏（tripitaka, three baskets）だ、経蔵（sutta or sutra pitaka）律蔵（vinaya pitaka）および論蔵（abhidharma or abhidharma pitaka）の三つねり、そのうち経と律の所蔵する内容たる「法」（dharma, dharma）せばの能説するものの所記である。しかも「經」は思想、「律」は生活の両方面にわたることをその特色とするところである。そして第三の「論」はまさに、その師説たる法に対応し相応しゆふむする弟子分の者の「対」（abhi）法なのである。

一方中田の図書館学においてその実質をなすと考えられる読書学（science of reading or readership 筆者試英訳）において、「読書主觀」といわれるものは、特にその宗教読書論の場合を参照する」とによつて考えると、おきの仏の能説ないしは法の思想面を指すようであり、同じくそこにおいて「生活主体」と呼ばれているものは、法の生活面に関連する記述に対応する実践人のことのようである。いわく、「我々が読書するということは、我々の読書主觀が、著者の著者主觀の立場に立ち、忠実にその表現に導かれて、著者の経験を追体験することである。」ふ。（梶井編『中田邦造』155頁）そしてここで「著者主觀」とよばれるものが、まさに仏法の能説者たるブッダそのひとの宗教的哲学的境涯と見てよからう。仏教のテクニーカーではそれを法身（ぼつしん dharmakaya）仏と呼ぶ。したがつて、そこに「われわれの」もちものとして称せられる「読書主觀」は、いわゆる宗教心であり、あるいは仮性もしくは菩提心（bodhicitta）と考へてよいものである。それがまさに中田も著しく関心をもつた鈴木大拙の「靈性」でもあつたろう。同時に中田は、れきの文に統けて、「それ〔著者の著作主觀の立場に立ち、忠実にその表現に導かれて、著者の原経験を追体験するといふ〕は、必らずしも我々の生活主体が、著者の生活主体のものに、追従する」とではない」と注意する」とを忘れてはならない。

つまり仏教でいえば、仏典の能説者である仏陀釈尊にも「著者」としての生活主体たる方面があり得たわけである。そしてそれを同じくテクニーカーでは現身（para - sambhogakaya）仏とこう。姉崎正治博士の「」ときは、「現身仏・法身仏」の本題で、法華経全体を翻譯してゐる。そしてサンボーガ（Sambhogha）は受用（じゅよう）とか享受（enjoy）の意味の語で、それには対自（sva, self）と対他（para, other）の區義がふくまれる。おきの法身はその自受用（self - enjoyment）のものでありながら、他受用として生活主体の外在に進展する意味を内在させるから、これを法身とも現身仏の当体たる應身仏（人間釈尊）とも異なるた第三の概念として報身（ほうじん）と呼ぶ。阿弥陀仏の「」

きは報身仏にほかならない。

中田は思想的にも体験的にも仏教に深く、しかも正確に達したひとであつたから、随處に仏教用語を用いている。とくに「上求菩提的精進」および「下化衆生的奉仕行為」（前掲書158頁参照）の両語によつて、いまのべた自受用（法身）、他受用（報身）の義を的確に適用して読書の人生論的意義を明確にしたことは最も注意してよかろう。いわく、「そういう〔讀書主觀が生活主体の奥底から動き出すという〕讀書は、どうすればできるか。〔またそれが〕誰にもできるためには、どういう処置が必要なのか。内に上求（じょうぐ）菩提（注自身のさとり）的精進（じょうじん。注ボサツに六度の行あるうちの禪定直前のもの）に功をおさめている人が、社会的に下化（げけ）衆生（しゅじょう注人間に限らず、すべて生命あるもの全体をさす）的奉仕行為に出ることが多いように、すぐれた先人の手になつた宗教図書によつて、自由自在に宗教経験の世界を味わう途を拓かれた満足と感謝に浸つてゐる人々は、そういう讀書がすべての人々によつて実現されることを念願せずにいられないであろう」と。これはあえて金光教教団所属図書館のために記述したものそのため、宗教的色彩をもつ文章になつたことは免れぬとしても、「宗団の図書館経営にあつては、こうした意味において万人の讀書主觀の印象をはかることが、中心的なねらいどころとせらるべきでないかと私は考えている」と書き添えられたところは、創造そのひとが、自身の精進（自行）のまま社会的奉仕（外化）の実践家たることを如実に自証されたものと見る。

念のためさきの期間中、金光教（注）に寄せた中田の文題を通覧するに、初中後の三段の内面的心境的展開がそこにあると見られる。最初一回は、「宗教讀書について」として、ほとんど打切りの気持ちで総論的に、分量的にも手短かに書いたばかりであり、恐らくこの「宗教讀書」の語も、彼が創造した用語でなかつたがと見られる。また事実中田は「創造的無」（11頁）「創造的人格」（同）「創造的働きの自由」（20頁）の「とき語そのものをしばしば用いたひどい、そこには

西田博士の思想的ならびに人格的影響や感化が甚大なのであるが、しばらくは、「宗教讀書」の語にもとづいて思索と考究を進めながら、中段としては、そうした宗教讀書における「宗教心」の問題に至り、ついに入信の機と、進んでは信決定における讀書の意義と実際を見定め、そのあととの問題として信生活の「接続」に際しての宗教讀書の特色や方法について詳述細記した箇所があり、それをまた讀書現象における宗教性として総括している。のこる後段というのは、「宗教教育と讀書」と題した前後三回の論述である。つまり学校教育、とくに公教育における宗教教育の仕方やその意義および範囲ということがらで、戦後日本宗教学会などでも専門委員をあげて真剣に討議論究したテーマなのである。そして最後的に中田が到達した宗教讀書上の透徹した立場をまとめたのが、「靈感（インスピレーション）と讀心」の一論であつたとしたい。

靈感

靈感の語については、アメリカの図書館界において、民衆の讀書目

的に（一）インフォーメーション（報道）、（二）レクリエーション（娯楽）、およびインスピレーションの三類型をあげてゐるに参考し、「図書の形體的取り扱いに主力を奪われ」「讀書そのことを深く追求しない」日本の図書館界への警告の意味でも、「讀書準備への奉仕」の段階から、「讀書そのことへの奉仕」にまで進展させようとして、たまたま宗教讀書論を連載してきた『土』誌（の最終回分（20号））に、「讀心」の問題と併せて真にあるべき書物と人間との間柄を具体示したのである。

最後に、中田自身も讀書の仕方に、「讀事」「讀文」および「讀心」の三様あることを言つてゐるが、さきのアメリカの三類型と対応しなくもない。そして特に心を読みとるという、宗教讀書の特質と意義とを、讀心的讀書のうえに見いだしてゐるのである。ひとはバイブルを読み、あるいは道元、親鸞の書を読むであろう。「新約聖書が部分的に生れて以来、二千年に近い時代の経過において、世界にわたつて莫大な数の人々に靈感を与えてきたのは、単にその矛盾しがちな知識内容を（注報道的に、あるいは娛樂的に）伝播してきたからでなく、それ

を通じて、記者等が感じとり信じ求めたごとく、人々が感じとり信じることを実践したからであろう……。その実践的信仰こそはバイブルの客観的精神であり、バイブルの記者達の全体を貫くものである。キリスト自体がその真生活の実践者であり、使徒たちはそれを忠実に追従したものに外ならない。バイブルの読心的読書とは、それにふれることであり、それにふれて個我への執着を断ち切つて働くことが、所謂十字架を負うて生きるということであろう。働くことは自己がしていることには相違ないが、自己において生きるのは、その客観的精神であるということになるのである。」と。(前掲書222～223頁) 中田がそのようにのべた時、彼には宗教としてもはや神道も仏教もキリスト教もその別はない。そのことは師の西田においても「善の研究」以来、同じ方向にあることながらであった。すなわち三十歳代において金沢にありながら、一方では参禅のはげしい体験を積みつつ、他方ではバイブルと親鸞の歎異抄とを「実在としての神」(善の研究、第二篇、最終章) の視点から一元論的に重ね読むことにつけ、同書第四篇(宗教) を成し、しかもこの書の世に出でた(明44一月) 直後の時期に、「愚秀親鸞」を草して、「余の家は真宗であつた、余の母は真宗の信者であつた」と呼称しつつ、それを三十五年後の最後の論文「場所的論理と宗教的世界觀」(昭201～4月) の冒頭の「ひと誰にも宗教心がある、しかも入信の人は稀であるが、学者は宗教体験を積んで、世の人々にこれを説明する責任がある」(取意) の句に連接させた一事に、中田の靈感や読心の読書論にふかく相通するものを見いださずにはおれない。

むすび—— 残された問題

最初にのべたように、北陸とはいうまでもなく北陸道の略称として用いられたことばで、都の京都辺を中心に、若狭・越前・加賀・能登・越中・越後・佐渡の七国を悉くめて呼んだものが、廢藩置県後は、府

県別となり、その体制下すでに百年以上をたてた今日では、北陸の概念も限定化した。しかし文化史的、とくに宗教史的に見たばあい、依然として石川県を中心とした旧藩時代からの社会的・思想的特色は強大なようである。本稿においては中田邦造というもと西田幾多郎門下の傑出した図書館人を、その読書学、とくに宗教読書論の方面で批評しようと試みたが、資料その他の関係でその不十分なるこというまでもなかろう。けれども、将来への企図としては、昨今の社会教育論でもある生涯教育思想として全体的に中田邦造の精神構造を解明し得と考えている。それは同時に同氏と師弟関係にあつた本県出身の西田博士その人の思想的影響と人格的感化の実際をさぐることになるのであり、ひいては西田そのひとのうえにも宿り得た北陸の歴史的社会的な精神的風土の意義を明確にすることで、郷土には西田の他にも鈴木大拙、山本良吉、あるいは三宅雪嶺、木村栄(ひさし)、藤岡作太郎さらには、暁鳥敏(はや)はじめ、多数の文化的先覚者が出ていていることで、そういう人脈の根底に如実にはたらいているものの、生涯教育論的展開の一大実証として邦造の懷いた読書思想の普遍的意義とその真理性を哲学的立場において明らかにしていくことが、こされた課題であろうと考える。

(昭56・5・31)

(注)
金光教は安政六(一八五九)年、川手文治郎(赤沢文治)が始めた。本部を岡山県浅口郡金光町に置く。天地金乃神を主神とし、忠君愛國・死生安心を主旨とする。神道十三派の一。戦後、天地金光教の別派が生れた。